

俳句、されど俳句

— 趣味の世界 —

日野病院名誉病院長 玉井 嗣彦



女性の何ごとにも持つ好奇心はたいしたものです。男性は足元にも及びません。テレビの公開番組などに客として出ているのはほとんど女性です。暇もあるのでありますが、やはり好奇心の塊であると思います。

御多分にももれず、私の家内もそうです。医師としてフルタイムの仕事をしながら、趣味にもいろいろと忙しい。現在最も熱心なのは俳句です。所属している結社の雑誌のほかに、定期購読している『サンデー毎日』の「サンデー俳句王」欄にせつせと投句しており、毎週火曜日の発行日には待ちかねて新聞受けに取りに行き、その場で開き、「ああ、今週もダメか」などがっかりしたりしています。

佳作でも載れば大したもの、その都度、亭主馬鹿を発揮して病院で掲載頁をコピーして、職員有志におくばりしていますが、ご迷惑な行為かもしれません。しかし、世の中の森羅万象をたった17文字の中に一瞬にして凝縮するのは、診療の現場で職種を問わず物事を瞬間的に頭の中でまとめるのに役立つと家内は真剣に申していますので、その言葉を信じておくばりしているところです。

家内は発句のチャンスととらえているようですが、日頃のコミュニケーション不足を補うために、休日であっても、土、日曜日のいずれかには事情の許すかぎり、私は家内を愛車に乗せて、日野病院眼科入院患者さんの回診に出かけています。

時には江府から大山に入り蒜山まで足をのぼすことがあります。下界はなお炎暑のさなかでも高原は秋の気配。早くも冬仕度か、夏草を焼く煙がまっすぐに空に舞い上るのを眺めていると、高原の秋を肌で感じることができます。かつて、本欄で紹介した家内の「高原に 煙一本 秋立ちぬ」の心境です。

俳句、されど俳句ですが、趣味の世界に句作をしなくても、参加するだけでも楽しいものです。今年も又、すばらしい日野路の秋を楽しみたいものです。

次の数句は、秋を迎えて、自宅での風景を家内が詠んだものです。私はもっぱら”評論家君“の立場にいますが、ここではコメントを控えさせていただきたいと思います。

老二人 猫一匹の 夜の秋
和紙になじむ インクの香り 夜の秋
のど飴を 分かちて二人 秋の雨
良妻も ときに悪妻 濁酒
秋天や 老いても消えぬ 力瘤
わが夫と 影をひとつに 良夜かな



(カットは玉井嗣彦名誉病院長)